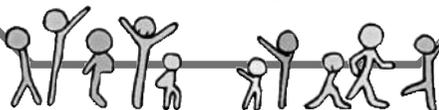


込みについての実感のありようによっては、研究は衰退していく可能性もある。

もう一つが、ソクラテス・プラトン哲学についてである。ヘレニズム期より後の西洋哲学史において、プラトン（的）哲学が優位であった時期とアリストテレス哲学が尊重された時期がある。前者としては、教父哲学の時代、ルネサンス期が、後者としてはスコラ哲学の時代、そして20世紀（特に後半）以降現在に至るまでが挙げられる。プラトン優位時代はまた訪れ得るのであるのか。プラトンの著作はギリシア哲学についての哲学的知識がなくともとりあえずは楽しめるようなものである。しかし、それでも、ギリシア哲学史研究の基盤を欠いたところでは、それは十分には機能を果たし得ないかもしれない。一見「割に合わない」ようではあっても、一定数の学者がギリシア哲学史研究を続けることは必要なかもしれない。

古典を撫でる『アクタ・ サンクトールム(聖人伝)』

文学部 小野 賢一



この春、手術・入院を経験し、海外渡航ができない健康状態になってしまった。そこであらためて海外渡航をせずに、いかに愛知大学で生活を充実させることができるかを考えてみた。手始めに自分の学問について、振り返ってみることにした。

私の専門は西欧中世史である。中世史家が用いる史料は、主に5世紀から16世紀頃に書き記された古文書である。ヨーロッパの古文書館では生の史料をみることができる。現物が残っていることもあるし、写しだけが残っていることもある。千年も前に書き記されたものとは思われないほど鮮明な史料に出くわすときもある。そのような幸福に巡り合ったときには、西欧中世史を専攻してよかったとしみじみ思う。これら西欧中世の史料の多くは、ラテン語で書かれ

ている。ラテン語は古代ローマ帝国で使われていた言語であったが、ローマ・カトリック教会が教会で用いる言語としてラテン語を採用したこともあり、中世を通じて学術・行政・法律などの文書はラテン語で書き記されることとなった。

西欧中世の社会は、「戦う人」である貴族と「祈る人」である聖職者と「耕す人」である農民の三身分が明確に分かれた社会であった。これは、インド・ヨーロッパ語族に共通して見受けられる特徴である。貴族と農民は、古い時代のドイツ語やフランス語などの俗語を使って生活し、ラテン語を使いこなすことはできなかった。そのため、唯一ラテン語を使いこなすことのできた聖職者が、学術・行政・法律などの文書を扱った。西欧中世の社会では、聖職者が知識を扱う階級であった。中世の日本と異なり、役割分担がはっきりしていたのである。中世のヨーロッパに成立した大学には、ヨーロッパ各地から教師や学生が集まった。当時の大学の教師や学生の身分は聖職者であり、共通語はラテン語であった。この共通語としてのラテン語のおかげで、中世のヨーロッパの大学は国際的な空間であった。

中世の大学生は熱心に勉学に励んだが、遊び人の学生もいた。またアルバイトに励む学生もいた。たとえば葬式で泣く「泣き坊主」のアルバイトなどがあった。学生寮もあった。パリ大学は通称ソルボンヌ大学といわれることもあるが、ソルボンヌとは学生寮をつくった聖職者の名前である。ヨーロッパ最大の学生街は、パリのカルチュ・ラタンと呼ばれる地区であるが、これは「ラテン語の地区」という意味であり、中世のパリ大学においてラテン語で授業が行われていたことの名残である。中世の大学では、あたかも教師たちはトサカを逆立てて争う鬮鶏の鶏のように論争していた。こうした学生と教師の日常の風景は、今の愛知大学にも受け継がれているように思われる。

中世の大学は教師と学生が組合をつくることによって成立した。この組合のことを「大学 universitas」といった。つまり大学とは、もとは教師と学生の組合であった。大学が、他の教育・研究機関と比べて、外部の権力からの自立



性がきわめて強いのは、学問を行う組合として大学がはじまったことに由来する。愛知大学は、勉強したい教師と学生が第二次世界大戦後、豊橋に集まってできた大学である。つまり愛知大学も、もとは教師と学生の組合であった。その成り立ちゆえに、中世のヨーロッパの大学の自立の精神と同様の精神が、今も愛知大学では生きているように思われる。

愛知大学の先学たちがたくさん本を集めることができたのも、おそらくこの成り立ちによる。その恩恵を被って、生の史料ではなく、刊本ではあるが、中世のヨーロッパで書き記された文書を、私たちは愛知大学で読むことができる。

今私が夢中になって読んでいる文献は、『アクタ・サンクトールム』Acta sanctorumである。それは、17世紀にボランドゥスという名のイエズス会士を中心に集まった人々の共同研究によって編纂された聖人たちの事績録であり、膨大な数の聖人伝や奇蹟録が含まれている。本文だけでなく、学術的に価値の高い註解もラテン語で書かれている。『アクタ・サンクトールム』は、千年以上ものヨーロッパの知の蓄積と幾世代にもわたる碩学たちの献身的な努力によって生み出された。愛知大学に赴任して、この文献が、豊橋図書館の書庫の本棚一面に陳列されているのを見たときは、驚かされたものである。一般の図書館などで見ることができる文献ではないので、在学中に書庫に入り、『アクタ・サンクトールム』の威容を見て、ヨーロッパの文化の重層的な蓄積を感じとって欲しい。



1. 今、古典ブーム到来！

それにしても、今回のLinguaのテーマは、なんと今の世の中の流れに一致しているのだろう。

常々、とっつきにくそうなものに興味を持ってもらうには、どうすればよいかと頭を悩ませている私は、この数年、NHK番組『100分de名著（注1）』の特に古典作品を扱う回で感心することが多い。なぜなら、古典作品は、現在社会に通じるもの、現在の私たちが共感できるものを含んでいる、だから古典作品は、時代を経て、書かれた地域を超えて、生き残っているのだということ、番組は上手く紹介しているからだ。

そして、2017年の出版界では、羽賀翔一による『漫画 君たちはどう生きるか』が話題となり、吉野源三郎の原作本（1937年）も書店売り上げの上位を占めるということが続き、2018年春のテレビ界では、『モンテ・クリスト伯』（デュマ作、1844-46）の放映が始まっているのだ。

日本の制作会社がドラマ化する本を探していき着いたのが19世紀フランスの小説家デュマの作品ということならば、きっと他にも面白い古典作品はある！もう、これは、古典作品を読まないに損だという気になってくるのではないか。

さて、ロシア古典作品として、今回のLinguaではトルストイの『戦争と平和』（1865-69）を取り上げる。

『戦争と平和』は大変長い作品で、名前が出てくる登場人物は全部で500人以上もおり、読み始めても、その長ささと登場人物の人間関係の複雑さで挫折してしまう作品であるが、いろいろな読み方ができる作品である。

2. 悩める若者よ、読むべし！

『戦争と平和』は2016年にBBC放送でもドラマ化されている（全8回）。昨年、BS放送で放